

企画展

文と絵で伝える地域の歴史 「浜松今昔物語」

平成28年2月1日(月)～平成28年4月24日(日)

磐田市在住の郷土史家「小林佳弘氏」(ぱんぷきん出版編集長)は、『姫街道「本坂通」今昔物語』・『静岡県内「信州街道」塩の道今昔物語』など、多くの書籍を著しています。その本の表紙絵や挿絵を担当しているのが、洋画家の「大須賀義明氏」です。

今回は、「姫街道」「塩の道」などの街道に視点を当て、「京丸牡丹」や「勝坂神楽」、『井伊家のはなし』など、広く「浜松市」に残る数々の史実を、お二人の文と絵で紹介しています。



浜松文芸十人の先駆者紹介

その7

《浜松歌壇俳壇の指導者》

かとうせつちよう
加藤雪腸

「加藤雪腸」は、従来の十七字俳句に行き詰まりを感じて、「自由俳句」を提唱した。大正14年、^{あらの}曠野句会を起し、月例会には次々と中央の俳人を招いた。

『層雲』主宰の荻原井泉水、同15年には『海紅』主宰の中村一碧樓、大橋裸木を招いた。そうして、大正15年には自由俳句誌『曠野』を創刊し、「浜松の新俳壇を担う」と題する論文を発表した。これには、47人が加わり、まさに浜松地方の全俳人を網羅した感があった。

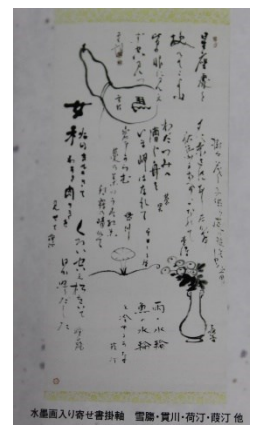


常に浜松俳壇歌壇の指導的な地位にあった。激情家で、高浜虚子とも口角泡を飛ばして論争し、碧梧桐を叱咤して持論を譲らなかった。

俳句を嗜む者があると聞けば、道を遠しとせずこれを訪ね、人情豊かでよく門弟の面倒をみた。

浜松地方で文学を好むもので、この当時雪腸の影響を受けないものはいないといっても過言ではなく、短詩型文学を通じてこの浜松地方の文化向上に尽くした功績は多大である。

昭和7年(1932)年、浜松市内で交通事故に遭い、死去。享年57歳。



浜松文学紀行

鷹野つぎと浜松ステーション

『鷹野つぎ著作集』第三卷所収の「思ひ泛ぶままに」に、次の一節がある。

放課後には、私たちは殆ど連日、浜松駅に帰還兵を送迎しに行った。

停車場近傍の宿舎には、多分急増バラック建てかと覚えてゐるが、披露食堂の一隅にオルガンが据ゑてあって、私たちは兵士の休息してゐる時に、歓迎歌、或ひは慰労歌を唄った。

お国のために長々と、ご苦労さまでありました。お送り申したそのときは、桜の花が真っ盛り、散らしてならないこの桜。また咲く春が来たならば、算盤そろばん以って、立派に働らく為ぢやもの……。

斯うした平易な文句で唄うのであるから、凱旋兵士の中には、愉快げに掛声する者もあった。私たちの誰かがオルガンを弾いた。私も時に弾いて手首に冷たさを覚えてゐるから、季節は冬も漸くやうや深くならうとする頃でもあったらう。

明治22年(1889)9月、東海道線の浜松、豊橋間が開通し、浜松停車場が業務を開始した。翌年4月の天竜川鉄橋の完成により、浜松、静岡間が開通して新橋から横浜までがつながった。

田んぼの中にできあがった木造平屋瓦葺きの駅は、「ハママツステーション」と呼ばれ親しまれた。駅広場の西方から新川の木橋まで柳の木が植えられ、商店や郵便局、旅館が建てられ、浜松町の中心が駅周辺に移って行った。

明治37年2月に日露戦争が勃発、浜松駅は兵隊の途中休憩地となり、駅前広場にバラック建ての接待所が急造された。茶菓の接待、歌の合唱、ホームの見送りなどに、浜松高女の生徒や婦人会の人たちが動員された。

引用の部分で歌ったのは凱旋帰国兵への慰労歌だが、征途の兵隊には、「征け征け男子、日本男子」や「忠君報国の歌」などが歌われた。同巻所収の「日露戦争」「戦捷国の民」ほかに、日露戦争下の浜松の様子が多感な女学生つぎの目を通して生き生きと描かれている。つぎは、日清、日露、第一次世界大戦、満州事変、太平洋戦争と五度の戦争に際会、戦争最中きなかの昭和19年3月、結核のため満53歳で没している。

「渋江抽斎」や「佐橋甚五郎」に浜松を登場させている森鷗外も、軍医として日露戦争の戦地である大陸に渡り、凱旋帰国の途次浜松駅で浜松婦人会の慰労と歓迎を受けている。日露の開戦は37年2月、終戦は翌38年9月であった。鷗外が凱旋帰国したのは44歳の39年1月で、この時鷗外をプラットホームに出迎え花束を贈ったのは、浜松最初の女医である内田みつであった。みつの養子となって産婦人科医院を継いだのは内田六郎である。六郎は、荻原井泉水主宰の自由律俳句「層雲」の同人で、種田山頭火とも親交が深かった。また、硝子絵・大津絵・浮世絵・陶器等の蒐集家で、著書に「家蔵江戸版オランダ和蘭絵」、「硝子絵」。句集に「鶴を待つ」などがある。浜松市美術館生みの親は六郎である。また、同じ医者仲間作家の藤枝静男の骨董の師でもあった。